

劉丹

## 1. 事業実施の目的

本事業は、2025 年 6 月 7 日から 6 月 8 日にかけて、日本文化人類学会の研究大会にて個人発表をし、他の研究者と意見交換することを目的に申請した。

## 2. 実施場所

筑波大学・筑波キャンパス（茨城県つくば市）

## 3. 実施期日

2025 年 6 月 06 日（金）～ 2025 年 6 月 09 日（月）

## 4. 成果報告

### ●事業の概要

日本文化人類学会は、人類の文化を研究する文化人類学、社会人類学、民族学などの発展を図ることを目的とする学会であり、年に 1 回、研究大会が開催される。

2025 年度の研究大会では、個人発表 159 件、分科会 11 件が行われた。報告者による集計によれば、個人発表のうち動物・植物・モノに関する発表は計 18 件あり、そのうち農業・養殖業に関するものは 9 件であった。また、18 件のうち 15 件が、アクターネットワーク理論、マルチスピーシーズ、多自然主義といった視点を取り入れて議論を展開していた。これらの発表の多くは大学院生や若手研究者によるものであった。大学院生の間でのマルチスピーシーズやアクターネットワーク理論の関心の高さを伺い知ることができた。また、中国や台湾に関する発表は 14 件であり、そのうち中国出身の留学生による発表が 8 件であった。これは中国における現地調査の難しさを示しているものと考えられる。

報告者は、個人発表のセクションで自身の研究発表を行った。また、前述の農業・養殖業や中国を主な関心領域としつつ、アートと先住民、医療と人類学などのテーマにも関心を持ち、計 16 件の発表を聴講した。自身の発表については後述の通りであるが、以下にまず、とくに印象に残った発表について報告する。

澤井充生先生（東京都立大学助教）による発表では、改革開放期の北京市および河北省のハラール産業の事例を通じて、屠畜工場における民俗知の継承が論じられた。屠畜工場は都市の周縁に設置されることで、人々の目から屠畜の現場が遠ざかるようになり、屠畜の不可視化がさらに進んだ。また、これまで屠畜の担い手であった「下刀アホン」という役職は制度の上では廃止されたが、一方でその新世代が育成され工場へ派遣されている。屠畜の作業は、下刀アホンの新世代のほか、回族や回族ではない解体作業員によって担われている。このような構造のもとで、屠畜に関する民俗知は細々と継承されているものの、同時に工場経営者側の要求に応えることも求められている。血や臭いが伴う屠畜とは少し異なるが、農作物の生産の＜不可視化＞も進んでいる。その生産における民俗知の伝承を考えるうえでは、

澤井先生のように通時的な変化を意識しながら整理する必要があるだろうと報告者は考えた。

秦夏萌さん（東京大学大学院生）の発表では、中国における「貧困群衆」（中国語：困难群众 kunnán qunzhong、）による「慢性病カード」（中国語：慢性病就医卡 manxingbing jiuyika）の取得事例が紹介された。「貧困群衆」は制度上の概念であり、主に身体障害、失業、扶養者の不在などにより、衣食住といった最低限度の生活を維持することが難しい人を指す。慢性病カードは、高血圧、高血糖などの慢性疾患をもつ患者を対象とするもので、この慢性病カードを取得すると、入院しなくても入院と同額の医療費の払い戻しを受け取ることができる。報告者の調査地で頻繁に耳にした「住院才会報」（入院しなければ医療費の払い戻しがない）という語りが示唆するように、通常、医療費の払い戻しは入院した場合に限られる。

報告者自身は、これまで農村部で調査を行ってきたものの、農村部における医療制度への関心が希薄であったと反省した。また、質疑応答の際には、「農村戸籍」（农村戸籍 nongcunhuji）と「都市戸籍」（城市戸籍 chengshihuji）の区分が廃止されたことによる慢性病カードの取得への影響はないとする趣旨の発言もあった。中国では戸籍制度が子どもの就学や医療、年金などの福利厚生と密接に結びついており、これまでは戸籍が異なることで受けられるサービスに違いが生じていた。この問題については長らく議論が続いてきた。近年、戸籍の登録においては「農村戸籍」と「都市戸籍」が「住民」として統一されるようになったものの、子どもの就学や医療、年金などの制度の運用においては、旧来の農村戸籍と都市戸籍の区分が参照されているのが現状である。このことが慢性病カードの取得に影響しているかどうかは不明であるが、制度上の変化と実際の状況を慎重に区別して考える必要がある。

これらの個人発表の聴講に加えて、吉村竜先生（高千穂大学准教授）によるブックトークに参加し、その後、ブラジルの柿農園や中国湖南省のハス生産について意見交換を行った。報告者自身も農業について調べており、博士論文の執筆にあたって有意義な示唆を得る機会となった。特に吉村先生の著作である『果樹とはぐくむモラル』からは、作物に関する記述の際には生物学の基礎的な知識を備えた上で、育種学や遺伝学の基本概念を踏まえて記述し、議論する必要性を再認識した。そして、人類学の論考の魅力や価値を自然科学の研究者にも伝わるような形で表現する努力の重要性を改めて感じた。

## ●学会発表について

### ●発表の概要

報告者は個人発表のセクションで「中国湖南省農村部のハス栽培における姻戚関係のはたらき」と題する発表を行った。

中国を含む多くの地域では、農業経営などの事業において親族や姻戚関係の重要性が指摘されてきた。たとえば、インドの絞り染めやソロモン諸島の土地所有の事例が挙げられる。中国の事例を見てみると、こうした関係が社会関係資本として理解される傾向が強い。

近年、中国では婚姻によるつながりが血縁に代わって重視されるという議論がある。たとえば、経済活動の連携においても、財産相続をめぐる衝突が少ないことから、血縁より姻戚関係が重視される傾向があると論じられてきた。また、姻戚関係は、贈答や宴席、日常的な接触を通じて親密さが高まる点も特徴的である。一方、姻戚関係に基づく経済連携については、関係者同士の付き合いをどう理解するのかといった課題がある。

報告者は湖南省 C 県のアス生産の事例を取り上げた。作物の集約的な栽培が進む中、湖南省 C 県ではアスの大規模な生産が行われている。アスの作付面積は最小で 60 ムー（4 ha）、最大で 500 ムー（33.3 ha）に達している。アスの生産において、藕種（種苗用の根茎）の植え付けから、除草、施肥、収穫まで多くの作業が作業で行われる。そのほかにもアス生産には土地の賃貸料、農薬や肥料の費用、人件費など巨額の費用がかかる。そのため、労働力の確保や資金調達のために、栽培者は血縁や姻戚、地縁などの関係性を活用し、経営グループを組織している。そのなかでも、姻戚関係はとくに重要な役割を果たしている。発表ではあるアス栽培の経営グループ内部における人間関係の実態を描き出し、農業経営における姻戚関係のはたらきを明らかにした。

アス栽培の経営において、資金や人手の確保には姻戚関係が重要な資源として機能している。これは、労働集約的で高い初期投資を必要とする生産の特性によるものである。一方で、市場経済の影響や生活空間での日常的な接触が衝突を増幅させ、グループ瓦解の要因となっていた。姻戚関係には相互扶助的な側面だけではなく、常にコンフリクトが内在しており、その背景には血縁原理、個人の性格、知的権威といった複数の原理のせめぎ合いがある。また、農業生産に伴うリスクが、血縁ほど緊密でない姻戚関係において分担される傾向も見られる。これらの諸点を結論として述べ、発表を終えた。

## ●質疑応答

発表に続く質疑応答では以下の 2 人の方から貴重な指摘を頂いた。まず大阪観光大学の尤曉先生からは、中国において公務員の副業への規制が存在し、経営者がその規制を回避するために姻戚関係を利用している可能性があるのではないか、という指摘があった。今回の発表で取り上げた人物の一人は非常勤職員として C 県の公安局に勤務しており、このため副業規制の対象外となっているが、今後の調査や分析においては重要な視座を与えてくれる指摘であった。また、この点について誤解を招かないように記述すべきだと反省した。

また東洋大学の植野弘子先生からは、次のようなコメントをいただいた。事例の中で頻繁に対立していたのは、経営グループのメンバーの妻と、その夫の姉にあたる人物であった。この関係は姻戚関係においてとくに揉めやすい関係と考えられるため、例えば、当該妻と他の姻戚との関係に焦点を当てて分析を進めると説得力が増すのではないかとの指摘を受けた。この指摘からは、姻戚関係を一括りにせず、その特徴を踏まえてから事例分析を行う必要があるという重要な示唆を得た。また、植野先生から今回取り上げた事例がどれほど一般化できるのかという問いも投げかけられた。個別の事例と普遍的な議論との接続は報告者

自身も常に意識している課題である。人類学的研究としての意義を明らかにする必要がある。

●本事業の実施によって得られた成果

本事業の実施により、研究大会への参加を実現でき、日本における文化人類学の最新の研究動向を把握するとともに、他の研究者との貴重な交流の機会を得ることができた。また、自身の発表に対して、記述方法や姻戚関係の特徴を踏まえた分析、普遍的な理論との接続といった観点から有益なコメントや質問をいただいた。これらの指摘は、投稿論文の作成および博士論文の執筆を進めるうえで極めて重要であった。さらに、こうした経験は博士論文の質的向上に資するのみならず、報告者が今後研究者として歩むうえでのキャリア形成においても有意義な知見をもたらすものと考えている。

●本事業について

本事業の採択により、学会参加が可能となり、学会発表を通じて投稿論文と博士論文の執筆を進めていくうえで重要な示唆が得られた。本事業の採択に携わってくださった先生方並びにサポートしてくれた事務の皆様に御礼を申し上げます。今後とも学生派遣事業が継続される事を切に望む。

そして、報告者のチューターである新海拓郎さん（国立民族学博物館外来研究員）には発表原稿やスライドの校閲を行っていただくとともに、人類学の視点に加え、報告者に不足している自然科学の分野の視点からも貴重なご意見とコメントをいただいた。この場を借りて心より御礼申し上げます。